

【論文】

彼女の記憶の記録：William Trevor, ‘Matilda’s England’ における老いの意識

畑 中 杏 美

はじめに

老いを客観的にとらえることはとても難しい。そのことを、シモーヌ・ド・ボーヴォワール (Simone de Beauvoir, 1908–1986) は、他者からうける「啓示」という例をもって示している。

われわれにおいて年取っているのは他者なのであるから、われわれの年齢についての啓示が他者からもたらされるのは当然である。われわれはこの啓示に機嫌よく同意することはない。「はじめて自分が年取っているといわれるのを聞くと、人はつねに愕然とする」と O. W. ホームズは記している。私は50歳のとき、あるアメリカ人女子学生からその友人の言葉を告げられて、愕然とした、「じゃ、ボーヴォワールって、もうババアなのね！」(ボーヴォワール 338–339)

ボーヴォワールによれば、個人が「年取っている」かどうかの判断は、つねに他者によってなされる。誰もが、自分にとっての他者が「年取っている」かどうかの判断を、つねに主観的に行うしかなく、自分が自分に対して「年取っている」かどうかの判断をしてみても、それは他者からくだされる判断としばしば齟齬をきたす。一方、「年取っている」者たちは、内心では他者からの「啓示に機嫌よく同意することはない」ので、老いを認識するために他者を必要としながらも、自己判断を手放すことができない。つまり、老いという複雑で曖昧な現象をよりよく理解するためには、自己と他者、双方の認識に注意を払うべきなのである。ボーヴォワールのことばは、老いをよりよく理解するヒントを示してくれるが、移ろいゆく時代を生きる我々にしてみれば、自己と他者との意識の両方に目を向け、立ち止まってじっくりと自分の老いを理解するというのは、途方もなく困難なことのようである。

しかし、私たちは、老いゆく人を見つめる他者の視点と、老いゆく個人の内面とを同時に提示できる文学作品の助けを借りることができる。とりわけ、小説作品における作中人物という架空の個人は、読者にとっての他者であるが、読者は、他者であるはずの作中の個人の思考すらも作品を通して知ることができるため、小説は、様々な視点から老いについて考察しうる可能性をもつ形式である。

文学形式について言うならば、詩や戯曲は小説が成立するよりも古くから、老いを含めた人生の諸相を描いてきた。‘novel’という名詞には「新しいもの」という意味があり、形容詞で用いられる場合には「新しい、若い」という意味をもつことからわかるように(OED ‘novel’ sb. 1., a. 1.)、小説は詩や戯曲とくらべると「新しく若い」文学形式であることは言うまでもない。また、イギリスにおいて小説が成熟した19世紀の主流なジャンルのひとつであり、若者たちの成長を描く教養小説(*Bildungsroman*)のなかには、人の一生のうち、健やかな時期がおわり、能力が衰え、生産性がなくなる時期になったことを老いとする、単純に過ぎる二項対立的な描き方をするものもある(Hartung 28)。とりわけ老齢の人々への関心をもって書かれた文学に注目が集まるのは20世紀以降であり、いわゆる「老人小説」が珍しいものではなくなったのは、文学史的には最近のことである。

しかしながら、勃興期の小説にすら老いへの関心を読み解くことができることを考えると、⁽¹⁾イギリス小説が老いを描いてきた年月は決して短くない。そして、老齢の人々を描く小説は、歳月を経て変化する老齢の人々の姿だけでなく、個人が感ずる老いの意識にも関心を向けてきた。小説は、作中人物の容姿の変化だけでなく、作中人物の精神的な変化、内面的な成熟や衰弱を描きだし、作品を読む者が老いを多面的にとらえることを可能にするのである。

その好例を示すものとして、本論考では、ウィリアム・トレヴァー(William Trevor, 1928–2016)による短編小説「マティルダのイングランド」(‘Matilda’s England’, 1978)⁽²⁾を読み解きたい。ウィリアム・トレヴァーは1928年、アイルランド共和国コーク州のミッチェルズタウンに生まれた。ダブリンで教育を受け、トリニティ・カレッジ・ダブリンで歴史学を専攻し、学位を受けた。1952年、大学時代に知り合ったジーン・ライアンと結婚。その後イングランドへ移住し、ロンドン在住時に息子が生まれた。そのころは教師であり彫刻家でもあったトレヴァーだが、生計を立てるのが難しく、コピーライターの職に就いた時期もあった。30歳のとき第1作目の小説を出版し、1964年に上梓した第2作目『同窓』(*The Old Boys*)がホーソンデン賞を受賞。その後もホイットブレッッド賞をはじめ、数多くの賞を勝ちとった。長編『フールズ・オブ・フォーチュン』(*Fools of Fortune*, 1983)は映画化され、世界的なベストセラーとなった。2016年、イングランドのデヴォン州で亡くなるまでに、長編小説、中編小説、短編小説あわせて100以上の作品を世にのこした。

トレヴァーは、「つまらない作品をひとつとして書いたことのない」(若島 113)作家とすらいわれる。作中人物や作品で描かれる出来事を「冷静に見つめる揺るぎない眼力」をもったトレヴァーは、愛読者から「やや偏愛気味に絶賛」されていることを差し引いても、短編作家としての力量には定評がある(中野 274)。抑制された語り口で、広い地平を視野に入れつつも、作中人物の心に分け入り、経験や成長にともなう細やかな心情の細やかなうごきをとらえるのがトレヴァーの持ち味である。なかでもトレヴァーが、長年にわたって関心を抱き続けてきたのは、もう若くはない者や、孤独な者など、必ずしも成功者とは呼べない人々である。

たとえば「アトラクタ」(‘Attracta’, 1978)における主人公アトラクタが生きてきた時間の経過は、

彼女の「枯れ具合」も含めて、語りという光でもってあくまでも冷静に照らされている（合田 1-9）。また、「こわれた家庭」（'Broken Homes', 1978）においては、「壊れた家庭の犠牲者」である不良少年たちと、若き闖入者たちによってかき乱された87歳の女性の日常がアイロニカルに語られる。本稿が論じる短編「マティルダのイングランド」においても、作品を読み解くカギとなるのは、第一部で登場する81歳の女性であるが、意外なことに、この短編について老いというテーマを中心に据えて詳細に考察した論考は見当たらない。

「マティルダのイングランド」は、イングランドの田舎町に住む48歳の女性マティルダが語り手となり、自分が9歳の少女であったころから現在に至るまでの人生を振り返る作品である。現在は短編三部作「マティルダのイングランド」として知られているこの短編には、原形となる短編がある。現在は「マティルダのイングランド」の第一部に組み入れられている「テニスコート」という短編である。⁽³⁾ この作品は、1975年出版の短編集『リッツホテルの天使たちその他の短編』（*Angels at the Ritz and Other Stories*）のなかで発表された時点では、「テニスコート」のみで完結する作品であった。

第二部および第三部と、大幅に加筆修正が施されたことによって、読者はマティルダの生涯と彼女が生きた時代のイングランドについて、より詳細に知ることができるようになった。なかでも、第三部においては、マティルダの語りに重要な特徴づけがなされる。第三部の冒頭でマティルダは、やや唐突に、語りの現在である1978年における自分の年齢を明かし、自分が過去を「記録」しているのであるということ明かす。

I am writing this in the drawing-room, in fact at Mrs Ashburton's writing-desk. I don't think of it as a story—and certainly not as a letter, for she can never read it—but as a record of what happened in her house after the war. If she hadn't talked to me so much when I was nine there would not be this record to keep, and I would not still feel her presence. I do not understand what has happened, but as I slowly move towards the age she was when she talked to me I slowly understand a little more. What she said has haunted me for thirty-nine years. It has made me old before my time, and for this I am glad. I feel like a woman of sixty; I'm only forty-eight. (ME 89)

自分の人生に影響を与えた女性が語り聞かせたことをきっかけに、「記録」をつけるようになったという動機には説得力があるものの、上の引用でマティルダは「起きたことについてあまり理解できていない」と言う。記憶のなかのミセス・アッシュバートンの年齢に近づいてゆくにつれて、「ゆっくり少しずつ」理解してきているが、書きたいことについての理解が乏しいままに書いているマティルダの「記録」にはどんな意味があるのだろうか。また、「39年間も私 [マティルダ] にとりついて」いるというミセス・アッシュバートンが語り聞かせたことが、マティルダを「歳よりも早く

老け」させ、「まだ48歳なのに、60歳になった気がする」というのは、どういうことなのだろうか。

この論考では、「マティルダのイングランド」の語り手であるマティルダが、「記録」の書き手でもあることに注目し、「記録」することによって芽生えた老いの意識について示し、マティルダの老いが提示しうる可能性について考えたい。

マティルダと「かわいそうな老婦人」

マティルダの記録のはじまりは1939年、まだ幼いマティルダが老いや衰えを、他者のものとして感じ取っていたときのことである。

Old Mrs Ashburton used to drive about the lanes in a governess cart drawn by a donkey she called Trot. We often met her as we cycled home from school, when my brother and my sister were at the Grammar School and I was still at the village school. Of the three of us I was Mrs Ashburton's favorite, and I don't know why that was except that I was the youngest. 'Hullo, my Matilda,' Mrs Ashburton would whisper in her throaty, crazy-sounding way. 'Matilda,' she'd repeat, lingering over the name I so disliked, drawing each syllable away from the next. 'Dear Matilda.' She was excessively thin, rather tall, and frail-looking. We made allowances for her because she was eighty-one. (ME 41)

マティルダにはミセス・アッシュバートンの声は、「しわがれて、狂気じみてきこえ」、夫人の姿は「がりがりに痩せて、どちらかといえば背は高く、弱々しくみえ」ていた。20世期のはじめに生まれた子どもからしてみれば、81歳のミセス・アッシュバートンは前世紀の半ばに生まれた、年長いた夫人 (Old Mrs Ashburton) である。第一次大戦前には、「厩に馬がいて、四輪馬車が行ったり来たりしていた」 ('horses in the stables, and carriages coming and going' ME 46) チャラコム屋敷に住んでいたはずのミセス・アッシュバートンは、1939年の5月、簡素な二輪馬車 (governess cart) に乗っており、それを馬ではなくて、一頭のロバに牽かせていた。

イングランドにおいて、いわゆるカントリー・サイドにある家庭的で素朴な農村の風景は、20世紀初頭にはほとんど見られなくなっていた (大石 2)。1846年の穀物法廃止は自由貿易を推進し、19世紀末には英国国内の農業は衰退をみせる。1880年以降は英国政府による土地税の徴収に圧迫されて田舎の地主階級の資産もやせ細っていき、第一次世界大戦は英国のみならずヨーロッパ社会全体に経済的な打撃をあたえ、戦間期の1930年代にはカントリー・ハウスの荒廃が目立つようになる (Cannadine 88-125)。マティルダが生きた時代は、絵に描いたような牧歌的で温かみのあるイングランドが失われ、農村の風景が、人々の記憶のなかにしかない風景になろうとしていた時代だったのである。

第二次世界大戦がはじまろうとしていた1939年のイングランドにおいて、ミセス・アッシュバー

トンは、カントリー・ハウスに住まう地主階級の生き残りであった。マティルダの父親が購入した家と農場も、かつてはアッシュバートン家の所有であったが、第一次世界大戦後、領地を維持できなくなった屋敷の主ミセス・アッシュバートンから購入したものである。アッシュバートン家は、使用人に暇を出し、馬や農場を売り払ってもなお負債を抱えた。ミスター・アッシュバートンの死後、ミセス・アッシュバートンが一人で暮らす屋敷は、すでに銀行に差し押さえられて、ミセス・アッシュバートンは屋敷で余生を暮らすことを許されているが、子のない夫婦であったアッシュバートン家を継ぐ者はいない。ミセス・アッシュバートンは、大英帝国が栄華を誇った19世紀に生まれたが、第一次世界大戦を経験し、戦間期のイングランドで儉しく暮らすことを余儀なくされた「かわいそうなお年寄り」(‘Poor old thing’ ME 43)であったのだ。

しかし、ミセス・アッシュバートンは、かつての風景が失われていくのを見、移ろいゆく社会に身を置きながら、農場の買い手となった家族の子どもたちの成長を静かに観察していた。それまで、土曜日の午後に子供たちを招いてはお茶をご馳走していたミセス・アッシュバートンは、ディックが15歳、ベティが14歳、マティルダが9歳になった1939年の5月、時が熟したとばかりに、屋敷のテニスコートの草を刈り揃え、もう一度使えるようにしてほしい、と子供たちに依頼する。81歳にもなると「友だちがみんな死んでしまったから」(‘because most of her friends were dead’ ME 48)と、憐憫を誘いつつ、ゆっくりと時間をかけて子供たちを懐柔してきた「かわいそうなアッシュバートンさん」の周到さに気が付いたマティルダたち兄妹は、反感を抱きながらも、頼みを断ることができず、テニスコートの整備に取り掛かる。テニスコートを整備するために屋敷に通った夏、マティルダは、ミセス・アッシュバートンから身の上話を何度も聞かされる。それは書き手のマティルダに「とりついて」離れない記憶となった。

ミセス・アッシュバートンは、第一次世界大戦の経験を何度もマティルダに語り聞かせた。ミセス・アッシュバートンは、戦地にいる夫の無事を祈りながら、「平均の法則ということ考えると生きて帰ってくる人もいるはずだから」(‘[b]y the law of averages [...] some had to come back’ ME 47)と自分に言い聞かせ、屋敷の関係者や近所の人々の戦死の知らせを聞くたび、むしろ「夫が死なない確立があがったと感じ」(‘she’d felt that there was a better chance that her husband wouldn’t die also’ ME 47)すらした。戦争の時のことを振り返ると、人の生死についてそんな風に考えるのは「戦争そのものと同じくらいひどい」(‘as horrible as the war itself’ ME 47)、恥ずべきことであると思われるが、「家に残された女性は恐怖と利己心によって残酷になったの。残酷さは戦時中には自然なことだった」(‘the women who were left at home became cruel in their fear and their selfishness. Cruelty was natural in war’ 47-48)と、ミセス・アッシュバートンは、テニスコートを整備していた夏の間中、繰り返しマティルダに聞かせていたのだった。

マティルダが記録に残しているのは、イングランドの屋敷でひとり夫の帰りを待っていたミセス・アッシュバートンの心境だけではない。ミセス・アッシュバートンは、マティルダに、戦地の兵士が使っていた銃剣や毒ガス、塹壕や、生き埋めにされた兵士たちの話をしていた。

The way she spoke I knew she was repeating, word for word, the things her husband had told her, things that had maybe been the cause of his affected mind. Even her voice sounded unusual when she talked about the war, as though she was trying to imitate her husband's voice, and the terror that had been in it. (ME 48)

ミセス・アッシュバートの夫は無事帰還したが、第一次世界大戦前には活気にあふれる人だったのに、戦後神経症（‘some kind of shell-shock’ ME 66）のために「精神がやられてしまって」（‘his mind had been affected’ ME 47）、飲酒をやめられなくなった。ミセス・アッシュバートンがマティルダに話した戦地に関する事柄は、ミスター・アッシュバートンが語り聞かせた記憶を「一語一語、繰り返し」ているだけであり、彼女自身が体験したことではない。だが、ミセス・アッシュバートンが話す声が真に迫って聞こえたのは、ミセス・アッシュバートンが夫の恐怖の記憶を共有していたからである。

このころのマティルダには理解できていなかったミセス・アッシュバートンが語り聞かせた第一次世界大戦の記憶が、39年間もマティルダの記憶に留まり続けたのは、整備されたテニスコートでテニスパーティが開かれたためである。それは陰鬱さがただよう戦間期のイングランドにおける、夢のような光にあふれた夏の日であった。

I remember, most of all, what they looked like. Mrs Ashburton thin as a rake in a long white dress and her wide-brimmed white hat and her sunglasses. My father in his Sunday clothes, a dark blue suit, his hair combed and his leathery brown face shining because he had shaved it and washed it specially. My mother had powder on her cheeks and her nose, and a touch of lipstick on her lips, although she didn't usually wear lipstick and must have borrowed Betty's. She was wearing a pale blue dress speckled with tiny white flowers. She'd spent a fortnight making it herself, for the occasion. Her reddish hair was soft and a little unruly, being freshly washed. My father was awkward in his Sunday suit, as he always was in it. His freckled hands lolled uneasily by his sides, or awkwardly held tea things, cup and saucer and plate. My mother blushed beneath her powder, and sometimes stammered, which she did when she was nervous. (ME 56)

マティルダはこの日のことを鮮明に記憶している。ミセス・アッシュバートンは白い帽子とドレスを身に着けていた。マティルダの父親の顔は農夫らしく日に焼けて、なめし皮のように茶色いが、教会に行くときのダーク・ブルーのスーツを着ていた。母親の口紅や、おしろいの下で紅潮する肌、また、ベティの水色のドレスと赤毛は、夏の日差しの下で鮮やかなコントラストをなしてい

た。この色彩豊かな絵画のような光景のなかで、誰かが「昔そっくりですな」(‘Just like the old days’ ME 57) と言い、マティルダの父と兄がビールとサイダー(リンゴ酒)を配るのを見て、かつての屋敷の主を知る人が「まるであの人 [ミスター・アッシュバートン] みたいだわ」(‘Just like him’ ME 58) という声がマティルダには聞こえていた。テニスを楽しむ人たちのラケットからはじけ飛ぶボールも、食べきれないほどのサンドイッチやケーキを囲む人々の笑い声も、人目を盗んで二人きりになろうとしていた姉のベティとその恋人のコリンも、9歳のマティルダにはこの上なく美しいものとして記憶された。

だが、1939年の8月31日にマティルダが覚えたのは、明るく楽しいパーティに集う人々の様子だけではない。なかなか暗くならないイングランドの夏の夜、10時頃まではテニスに興じる人もいたパーティがお開きになるころ、マティルダはミセス・アッシュバートンが屋敷のキッチンで座っているのを見つけた。友人のベル・フライと別れの挨拶を告げに来たマティルダは、パーティを楽しんだ日に、ミセス・アッシュバートンが独りきりで泣いている理由がすぐには理解できなかった。

We wanted to say goodbye to Mrs Ashburton, but we couldn't find her. We ran around looking everywhere, and then Belle Frye suggested that she was probably in the house.

‘Mrs Ashburton!’ I called, opening the door that led from the stable-yard to the kitchen. ‘Mrs Ashburton!’

It was darker in the kitchen than it was outside, almost pitch-dark because the windows were so dirty that even in daytime it was gloomy.

‘Matilda,’ Mrs Ashburton said. She was sitting in an armchair by the oil-stove. I knew she was because that was where her voice came from. We couldn't see her.

‘We came to say goodbye, Mrs Ashburton.’
[...] We said goodbye again, but she didn't say anything. She didn't even nod or shake her head. She didn't kiss me like she usually did, so I went and kissed her instead. The skin of her face felt like crinkled paper.

‘I've had a very happy day,’ she said when Belle Frye and I had reached the kitchen door.

‘I've had a lovely day,’ she said, not seeming to be talking to us but to herself. She was crying, and she smiled in the lamplight, looking straight ahead of her. ‘It's all over,’ she said. ‘Yet again.’

We didn't know what she was talking about and presumed she meant the tennis party. ‘Yet again,’ Belle Frye repeated as we crossed the stable-yard. She spoke in a snappy voice because she was given to soppiness. ‘Poor Mrs Ashburton!’ she said, beginning to cry herself, or pretending to. ‘Imagine being eighty-one,’ she said. ‘Imagine sitting in a kitchen and remembering all the other tennis parties, knowing you'd have to die soon. Race you,’ Belle

Frye said, forgetting to be soppy any more. (ME 59-60)

色彩と光にあふれていた昼間のテニスコートとは対照的に、明かりをつけていないキッチンが夜の闇よりも暗い。その暗いキッチンにひとりでいたミセス・アッシュバートンは、ベル・フライとマティルダが去ろうとしたとき、「幸せな一日だった」と涙を流し、「終わってしまった」「またしても」とつぶやくのであった。ベル・フライは、81歳になり、「もうすぐ死ななきゃいけないって知りながら、キッチンに座ってこれまでのテニスパーティを思い出してるなんて」と「かわいそうなアッシュバートンさん」を憐れむ素振りを見せていたが、すぐに忘れて、かけっこに夢中になる。この時点ではマティルダにも、ミセス・アッシュバートンの涙の理由が理解できてなかった。幼いマティルダは、楽しい時間の余韻に浸りながら帰路につき、次のパーティが開かれる日を想像していた。テニスパーティの夜、お別れのキスをしたとき「しわしわの紙のよう」なミセス・アッシュバートの頬を唇に感じたマティルダは、ミセス・アッシュバートを、老いたる他者として認識していた。

しかし、戦争がはじまったということを知ったマティルダは、平和が長続きしてほしいなどという博愛主義的な気持ちにはなれず、父親と兄が無事に帰ってきてほしいとだけ考えている自分に気が付く。このとき、マティルダにはようやく、ミセス・アッシュバートンが言った「残酷さは自然だということが[...]平均の法則が、暗いキッチンでひとり過去を思って泣いていたことが理解できた」(‘that cruelty was natural in wartime, [...] I understood her law of averages and her sitting alone in her dark kitchen, crying over the past’ ME 62)。第一次世界大戦前にはそこにあったはずの、美しいイングランドの田舎屋敷と農地のなかで、ミスター・アッシュバートンとともに暮らした日々を、たった一日だけ「昔そっくり」の賑わいを見せたテニスパーティの日と重ねていたであろうミセス・アッシュバートンは、戦争によって平穏な暮らしが終わり、田舎屋敷が再び荒廃していくさまを予見し、「終わり」のときに涙を流していたのである。

第一部「テニスコート」から読み取ることができるのは、マティルダの記憶に刻み込まれた第一次世界大戦の記憶が、ミセス・アッシュバートンによってもたらされたものであるということだ。また、第一部が描く時空は1939年とそれより前のイングランドについてであり、序節において引用した個所にあった、マティルダが記録しようとしていることには、マティルダが生まれた1930年よりも前のできごとである、第一次世界大戦のことが含まれるということもわかる。第一次世界大戦についてミセス・アッシュバートンから語り聞かされた1939年、大戦の開戦を経験したマティルダは、ミセス・アッシュバートンの記憶をたどりながら、第二次世界大戦下のイングランドを生きることになる。

第二次世界大戦と家族の「終わり」

第一部において、ミセス・アッシュバートンの「終わり」の意味を理解したマティルダは、第二

部において、彼女にとっての「終わり」を経験する。戦争が始まるとすぐ、マティルダの父親は出征した。二度の休暇を自宅で過ごしたマティルダの父親が再び戦地に向かって数週間がたったころ、マティルダは父親の死を知らされる。マティルダが11歳になろうとしていた1941年のことである。父親が戦地から帰宅したのは二度とも木曜日であったが、父親の死の知らせが届いたのも木曜日であった。

The repetition was extraordinary, the three Thursday afternoons. That night in bed I was aware of it, lying awake thinking about him, wondering if he'd actually been killed on a Thursday also.

All the days of the week had a special thing about them: they had different characters and even different colours. Monday was light brown, Tuesday black, Wednesday grey, Thursday orange, Friday yellow, Saturday purplish, Sunday white. Tuesday was a day I liked because we had double History, Friday was cosy, Saturday I liked best of all. Thursday would be special now: I thought that, marking the day with my grief, unable to cry any more. And then I remembered that it had been a Thursday afternoon when old Mrs Ashburton had invited everyone for miles round to her tennis party, when I had realized for the first time that there was going to be a war against the Germans: Thursday, 31 August 1939. (ME 64)

曜日には「性格があり、違う色すらある」というマティルダにとって、月曜日は薄茶色、火曜日は黒色で、歴史の授業が2コマあるので、学校に行く日の中ではお気に入りの曜日だった。マティルダが一番好きなのは「紫がかった土曜日」であるが、父親の死をきっかけに、オレンジ色の曜日であった「木曜日はいまや特別な曜日」となり、「実のところ父さんが殺されたのも木曜日ではなかったかしら」と、とくに根拠のないことまで考えている。父親を亡くしたショックのあまり、「悲しみで印をつけてこれ以上泣けないほど泣いた」マティルダは、自分の置かれた境遇をミセス・アッシュバートンと重ね、ミセス・アッシュバートンからきいた第一次世界大戦前の平和な日々や、その再現としてのテニスパーティの日を思い出すことで、現実から眼を逸らそうとする。

偶然にも木曜日であった1939年8月31日のことを思い出すと、マティルダにとって「テニスパーティは家族のことと混ぜこぜに」(‘The tennis party had been all mixed up with our family’, ME 66) なり、「実家で暮らしていた家族の終わり」(‘It was the end of our being as we had been in our farmhouse’ ME 66) がテニスパーティであったのだとマティルダは考えている。農家屋のなかで暮らした家族5人での時間が戦争によって「終わり」を迎えたことは、子どもの頃のマティルダにとって重大な事件であった。第二次世界大戦は、マティルダから父親を引き離し、父親が木曜日に帰宅することはもうないからである。

だが、ここで注意しなければならないのは、マティルダは自分自身が体験した「終わり」を、マ

ティルダが生まれてすらいない「ひとつ前の戦争のあと」のこととも関連付けているということである。第一次世界大戦のあとの「もうひとつの終わり」とは、終戦後、屋敷に戻ったミスター・アッシュバートンが精神的に衰弱し、チャラコム屋敷と農地とが縮小していったことである。戦争は幸福だった時間に終わりをもたらし、広がりを持った空間を区切り、家族をバラバラにしていく。そのことに気が付いたマティルダは、戦地での経験から戦後神経症に苦しんだミスター・アッシュバートンの体験と、その後の屋敷の荒廃を、父親の死と自宅で起きた変化に重ね合わせるようになる。

たとえば、マティルダはチャラコム屋敷の庭を歩きながら、屋敷の主であったミスター・アッシュバートンの姿を思い浮かべようとする。だが、マティルダがぼんやりと思い描いていたミスター・アッシュバートンの姿は「消えてしまってその代わり、農場にいたころの父の姿がみえる」(‘the image would disappear and I’d see my father instead, as he’d been in the farmhouse’ ME 67)。テニスパーティで誰かが、父親がミスター・アッシュバートンにそっくりだ、と言ったことをまだ覚えているマティルダは、想像のなかで、顔すら知らないミスター・アッシュバートンを父親の姿に置き換えているのである。

第三部で明らかになることであるが、このころ、マティルダが通っていたプライマリー・スクールの教師ミス・プリチャードは、マティルダに神経症の傾向があるとマティルダの母親に告げていた。

‘There are casualties in wars,’ she [Miss Prichard] said, ‘thousands of miles from where the fighting is.’ She was speaking about me. [...] ‘*Folie à deux* the French call it,’ she insisted, an expression I welcomed and have never since forgotten. There had been *folie à deux* all over this house, and in the garden too, when he came back with his mind in pieces. She had shared the horror with him and later she had shared it with me, as if guessing that I, too, would be a casualty. As long as I lived I would honour that *folie* in their house. I would honour her and her husband, and my father and Dick, and the times they had lived in. It was right that the cruelty was there. (ME 122-123)

通例は戦地から帰還した人の病である戦後神経症だが、ミス・プリチャードは「二人精神病」「感応性精神病」と呼ばれる症状にマティルダが苦しんでいることを理解し、マティルダの母親に、「戦地から何千マイルもはなれたところにも戦争の犠牲者はいる」と言って聞かせていた。ミセス・アッシュバートンは戦後神経症の患者であるミスター・アッシュバートンが感じていた恐怖を共有し、マティルダはミセス・アッシュバートンに憑りついていた恐怖に感応して、その後、父親の戦死を経験した。戦地に一度も行ったことのない子どもでも、戦争によって傷を負うことがあるのだと考えたミス・プリチャードは、マティルダをそのような犠牲者のひとりとしてケアする必要がある

ると感じ、母親に助言をしていたのだ。

だが、過去をもとにした空想の虜になったマティルダは、その空想のために、家族に起きた変化によってより深く傷つくことになる。友人のベル・フライとチャラコム屋敷の庭を探検していたとき、マティルダはサマーハウスに、煙草の吸殻と、マティルダの自宅にあったはずのブランケットが放置されているのを見つけて、「ベティと休暇中のコリン・グレッグがここで逢引きしているんだ」(‘summer-house was where Betty and Colin Gregg came when Colin Gregg was on leave’ ME 72)と思う。二人は、戦争で離ればなれになっても愛し合い、コリンの休暇中には「テニスパーティのあとシャクナゲの茂みで抱きしめあっていたのと同じように」(‘like they’d been cuddling in the rhododendrons after the tennis party’ ME 72) チャラコム屋敷で再開している。テニスパーティの記憶と目の前の逢引きのあとを材料にしたマティルダの空想のなかでは、手入れされていないはずの庭に馥郁たる花の芳香があふれ、そのなかに佇むサマーハウスで、若い恋人たちがラグにくるまってすぐまた離ればなれになるお互いを慰めあうのだった。家に戻ってからも、宿題に集中できずに空想に耽ってばかりのマティルダには、自宅でくつろぐ「ベティがいつもよりきれいに見えた」(‘I thought Betty was more beautiful than usual’ ME 74)。これは幼い少女のたんなる空想のようでもあるが、マティルダは過去の記憶をもとに、姉とその恋人のロマンティックなひとときのストーリーを作り上げ、目のまえにある現実をそのままの形で見ることを避けている。そしてそのために、家族の現実を眼にしたとき、マティルダはより深く傷つくことになる。

コリンが帰宅していた日の晩、サマーハウスの裏手の茂みに自転車が二台寄せかけてあるのを見つけたマティルダは、サマーハウスにはベティとコリンがいるはずだと思い込み、サマーハウスの窓から中の様子を覗き見するが、サマーハウスで逢引きしていたのはマティルダの母親だった。母親と一緒にいた男性の顔をマティルダは見たことがあった。マティルダの母親は、農場で一人暮らしをしているレイサム夫人の家に行くと子供たちに告げ、しばしば夜に家を空ける日があったが、実はプロウ生地店で働く男性とサマーハウスで会っていた。母親の恋人の男性は結核のため兵役を免除されていた人で、婦人部隊として戦地にいる妻とは離婚するつもりでいた。母親は男性との交際を周囲の人々に打ち明けられずにいたのである。

父親の死のショックを乗り越えられていないマティルダにとって、母親に恋人ができたことは、家族の一体感をさらに失わせる出来事に感じられた。また、ちょうどそのころ、マティルダの兄が戦地で亡くなったと電報が届く。その日もまた木曜日であったのだが、曜日のことを気にしていたのはマティルダだけだった。

‘Thursday?’ my mother whispered, and when I explained she didn’t understand. She hadn’t even noticed that the two times my father had come home it had been a Thursday and that the tennis party had been on a Thursday and that the other telegram had come on a Thursday too. She shook her head, as if denying all this repetition, and I wanted to hurt her

when she did that because the denial seemed all part and parcel of the summer-house and the man from the Blow's. (ME 85-86)

マティルダは木曜日の繰り返しのことを母親に説明するのだが、マティルダの言っていることが理解できない母親は言葉に詰まって首を横に振る。この素振りには「繰り返しを否定するかのよう」にみえ、「サマーハウスとブロウ生地店の男のこの本質」をあらわしているように思われる。マティルダが父親の死のショックから立ち直れずにいる間に、母親は新しい恋人を見つけ、戦争が終わったときの再婚のことを考えていた。チャラコム屋敷の庭を歩いては父親のことを思い出していたマティルダは、恋人ができた母親を「傷つけてやりたい」とすら思う。戦争が終わって母が再婚すれば、継父と母親とベティとマティルダとの4人の暮らしが始まる。戦地へと向かう父親と兄を見送ったことにすら家族の終わりを感じていたマティルダには、母親の再婚を新しい家族のはじまりとして考えることができなかつたのだ。

第二部が記録しているのは、マティルダの戦時トラウマと、ミスター・アッシュバートンの戦後神経症が、ミセス・アッシュバートンの存在によってつながり、マティルダの中で過去と現在が混ざり合うさまである。過去とのつながりを強く意識しているマティルダは、現在ではなく過去に生きたいと望むようになるが、その過去とはマティルダの父親や兄が生きていて、家族で暮らしていたころの過去であると同時に、マティルダが生まれてすらいない、ミセス・アッシュバートンがミスター・アッシュバートンと暮らしていたころ、第一次世界大戦前の過去でもあった。ミセス・アッシュバートンが語り聞かせたチャラコム屋敷の古き良き時代のことを、マティルダは自分が生きてきた過去であるかのように感じ、その過去を現在に再現してその中で暮らすことを望むようになるのである。

「狂気」が見せたもの

幼いマティルダの混濁した意識のなかで過去と現在が混ざり合うさまが読み取れる第二部のあと、第三部が記録するのは、第二次世界大戦終戦後のマティルダが、マティルダの過去への執着のある種の「狂気」にまで発展させ、そのために孤独な暮らしを余儀なくされるまでの過程である。

ことのはじまりは1951年、マティルダの21歳の誕生日が祝われたときであった。マティルダの母親は「ブロウ生地店の男」(作中、彼の名前は一度も出てこない)と再婚しており、ベティは無事帰還したコリンと結婚して二人の子どもの母親になっていた。家族や友人、そしてプライマリー・スクール時代の恩師であり、教員を引退してからはマティルダの最良の話し相手でもあるミス・プリチャードも、プレゼントを持ってマティルダの21歳の誕生日を祝いに来ていた。

だがマティルダは、21歳になったことに喜びを感じてはいなかつたし、誕生日会を望んでもいなかつた。誕生日を祝いに集まった家族や友人は、年頃のマティルダが近所に住む誰かと結婚するだろうという憶測で盛り上がっているが、マティルダは実家を離れたくなかつたので、結婚を望んで

いなかった。マティルダが21歳の誕生日に考えていたことは、あまり折り合いのよくない母親と継父と、今後どうやって実家で暮らしていけばいいのだろうかということだった。実家をなるべく昔のままの状態で保存するためには、家を出ていかないほうがいいが、生地店を退職した継父と家で長い時間を一緒に過ごすことはしたくない。そんな悩みを抱えていたころ、ちょうどグレガリーという家族がチャラコム屋敷を買い上げたので、マティルダが過去に浸ってられるのは、家族や周囲の農家と農場の仕事をしているときだけだった。

だが、ある日マティルダに妙案が思い浮かぶ。グレガリー家の人々がマティルダの家を訪問した時、長男のラルフィー・グレガリーは感じのよい人だということにマティルダは気が付いた。チャラコム屋敷の購入と改修は彼が進めている事業であるという。ラルフィーと眼があったとき、マティルダの心の中で「ミセス・アッシュバートンの声がかどまし、9歳の私にきかせた何かを言っていた」(‘Mrs Ashburton’s voice echoed in my mind, telling me something when I was nine,’ ME 102)。長いこと空き家になっていたチャラコム屋敷に買い手が見ついたことは、マティルダにとって必然であったかのように思われた。失われたエデンを取り戻そうとするかのような、ミセス・アッシュバートンの努力は、第二次世界大戦がはじまってすぐ亡くなってしまったミセス・アッシュバートの代わりに、マティルダによって繰り返されることになる(Schirmer 111)。

それから3年の月日がながれ、テニスコートはふたたび整備され、チャラコム屋敷はかつての美観を取り戻していた。チャラコム屋敷の管理はグレガリー家の長男のラルフィーが担っていたが、彼はマティルダに助言をもらって屋敷の修復を進めていた。マティルダは、ラルフィーと結婚してチャラコム屋敷の女主人になることで、実家と屋敷の両方を自分の管理下に置こうとしていた。

マティルダの恩師ミス・プリチャードは、愛のない結婚をしてまでマティルダが自分の計画を成功させたとしても「過去は取り戻せないのよ」(‘[y]ou can’t make it come back, you know’ ME 103) と言ってマティルダを止めようとするが、マティルダはラルフィーと婚約し、屋敷の内装もミセス・アッシュバートンが幼いマティルダに語り聞かせたとおりに設える。結婚式の日のマティルダは有頂天であった。「全盛期のころ、ミセス・アッシュバートンが花嫁だった頃に見ていたような」チャラコム屋敷で自分もまた花嫁になったことにこれまでにない満足を覚え、マティルダは完璧な形で、過去を再現して暮らすという念願を果たしたかに見えた。

だが、チャラコム屋敷で暮らし、ミセス・アッシュバートンの立場に近づけば近づくほど、理想として思い描く過去と現在との差がマティルダには気にかかるようになっていく。過去だけを愛しているマティルダの夫婦生活が順調なものになりえるはずもなく、ラルフィーは子どもを欲しがっていたが、「子どもは私が正確無比に感知しているこのパターンをゆがめる」(‘[t]hey would distort the pattern I could so precisely sense’ ME 108) からと、マティルダは強く反対する。子のない夫婦であったアッシュバートン夫妻と同じでなくては、夫婦というつながりもマティルダには意味がなかったのだ。ラルフィーがマティルダよりも家政婦のミセス・ストリッチを信頼して家のことを相談していることも、ミセス・ストリッチが掃除をしているときの物音すらも気に障るというマ

ティルダは、チャラコム屋敷に「ラルフィーもミセス・ストリッチもいないときが一番幸せ」(‘I was happy in the house when Mrs Stritch wasn’t there and he wasn’t there’ ME 114) だと感じる。

空想と追憶の世界で自己満足に浸るマティルダの生活は、ラルフィーが客を招いて開いたパーティによって妨害を受ける。パーティのことを忘れていたマティルダは、嫌々ながらもラルフィーの客に紹介され、宴席に加わるが、客人のひとりから、グレガリー家は自動車の部品だけでなく、戦時中に銃器を生産した工場の経営で財を成したのであると知らされる。戦争が自分やミセス・アッシュバートンから奪ったものを取り戻したつもりでいたマティルダは、戦争によって得た富によって生かされ、暮らしているのだということに気が付き、冷静さを保てなくなる。パーティの食事を減茶苦茶にし、客人に切々とミセス・アッシュバートンが経験した第一次世界大戦の話をしてまわり、夫の脛当てを暖炉で燃やして、マティルダはラルフィーが招いた客をすべて追い返す。

ラルフィーが主催したパーティで、マティルダには「9歳のとき写真でみたミセス・アッシュバートン」(‘Mrs Ashburton, as she was in the photographs she showed me when I was nine’, ME 117) が、彼女の「夫といっしょに彼らのなかにおいて、微笑みあって」(‘Mrs Ashburton and her husband were among them, smiling at one another,’ ME 118) いる姿が見えていた。この時だけでなく、マティルダは強いストレスを感じたとき、屋敷のなかでミセス・アッシュバートンの姿が見えるようになっていた。それは幽霊ではないが、記憶のなかのミセス・アッシュバートンが「客間に座って、丸いテーブルの上に腕を伸ばしている」(‘She leaned back in her chair, one hand stretched out to the round table in front of her,’ ME 110) 姿をマティルダは眼にする。屋敷で一人であるときには「正気で」(‘sane’, ME 120) いられるマティルダだが、家政婦や、見知らぬ客が屋敷において、強いストレスを感じたときに、マティルダはミセス・アッシュバートンの姿を幻視するようになっていた。

ラルフィーが招いた客が屋敷からいなくなり、夫と口論をしている途中でマティルダは、ミス・プリチャードが母親に話していた、精神病の話を読み出す。ミス・プリチャードのいう「二人精神病」「感応性精神病」は、直訳すると「二人の狂気」となる。この言葉を思い出し、マティルダは、屋敷にも庭にも「狂気」が満ちていると感じる。「狂気」に感染したマティルダは、「狂気」によって作り上げた完璧なチャラコム屋敷に暮らしながら、夫は自分のことを理解してくれないのだと不満を募らせていた。健全な精神の持ち主であるラルフィーには、マティルダがなぜ過去にこだわり続け、彼女自身を苦しめ続けるのが理解できない。パーティにこだわるのなら、屋敷でもう一度パーティを開き、マティルダの過去を知らない人々と交流して楽しい記憶を新たに作ればいいと考えたラルフィーは、狂気を共有することなしに、マティルダへの愛を伝えようとしていたのだ。

だが、それはマティルダにとっては受け入れがたい愛であった。悲惨なお開きとなったパーティのあと、口論の末、マティルダと暮らすことに限界を感じたラルフィーは屋敷を出て行き、屋敷と庭以外の敷地をすべて売り払ってしまった。このころすでにラルフィーは、チャラコム屋敷に属していた農地のすべてがもう一度統合されることを望んでいたマティルダのために、マティルダの家

族や古い知り合いからも土地を買い上げていたが、それらをすべて手放した。マティルダが独りで住む屋敷の周辺には知り合いや家族が誰も住んでおらず、マティルダが家族や友人と呼べる人は、マティルダの記憶の中にしか存在しなくなったのだ。

マティルダがミセス・アッシュバートの客間で書き物をしている語りの現在では、マティルダが独りで暮らすようになってからさらに月日が過ぎている。マティルダは、「ミセス・アッシュバートの屋敷で戦後何が起きたのか」を書き留めているというが、これまでに述べたことからわかるように、マティルダの「記録」は、誰の眼にも明白な事実について書いた「記録」ではないことは間違いない。「マティルダのイングランド」において、第一部から第三部までを通して読み取ることができるのは、マティルダという個人のなかで渾然一体となった過去と現在の感覚であり、そのために過去への執着を「狂気」にまで発展させたひとりの女性の人生である。

マティルダがある種の狂気に苦しめられてきたことは間違いないが、マティルダは「記録」をつけている語りの現在においてもまだ、ミセス・アッシュバートンから受けついで記憶に苦しめられているのだろうか。48歳にして「60歳になってしまった気がする」という記述は、「かわいそうなおばあさん」に憑りつかれて「古い」、衰弱してしまったマティルダの嘆きなのだろうか。もしそうであるならば、まだ「狂気」のなかにいるマティルダはこの「記録」を、孤独な暮らしの中で、苦しみもがきながら執筆したのであろうか。

記憶の記録を書く人

ここで注目したいのは、マティルダが「記録」のなかで嘘をつき、ついた嘘の裏の真実を自分で明かしている部分である。マティルダが嘘をついていたのは、第一部において、マティルダが、自分が幼いころの家族の様子と、実家の様子について述べている部分である。次の引用は実家のキッチンについての記述である。

The kitchen hasn't changed much. The old range has gone, but the big light-oak dresser is still there, with the same Wedgewood-blue dinner-set on its shelves, and cups and jugs hanging on hooks. The ceiling is low, the kitchen itself large and rectangular, with the back stairs rising from the far end of it, and a door at the bottom of them. There are doors to the pantry and the scullery, and to the passage that leads to the rest of the house, and to the yard. There's a long narrow light-oak table, with brass handles on its drawers, like the dresser ones, and oak chairs that aren't as light as all the other oak because chairs darken with use. But the table isn't scrubbed once a week anymore, and the brass doesn't gleam. I know, because now and again I visit the farmhouse. (ME 44)

語りの現在におけるマティルダはすでに実家には住んでいないが、自分が暮らしていた過去とくら

べて、実家の現在の状況は「あまり変わっていない」(hasn't changed much) という。ドレッサーが「まだそこにある」(is still there) ことや、棚に置かれたウェッジウッド社製のディナーセットは「同じもの」(the same Wedgwood-blue dinner set) が今も飾られているということ、天井やドア、台所を中心とした間取りについても、現在形や現在完了形を用いてマティルダは説明している。かつて住んでいた実家について説明するときに、過去形を用いるのではなく、現在にかかる時制で語るのは、マティルダが「今でもたびたび実家をたずねるので、知っている」(I know, because now and again I visit the farmhouse) からであるという。

しかしながら、マティルダはいま、実家とそう離れてはいない屋敷に住んでいるのに、実家を訪ねることはできなくなっていた。その事実は、第三部の末尾で明かされる。屋敷にひとりで暮らすマティルダは次のように述べる。

I sit here now in her drawing-room, and may perhaps become as old as she was. Sometimes I walk up to the meadow where the path to school was, but the meadow isn't there any more. There are rows of coloured caravans, and motor-cars and shacks. In the garden I can hear the voices of people drifting down to me, and the sound of music from their wireless sets. Nothing is like it was. (ME 125)

語りの現在においてはすでに、マティルダの母親も継父も亡くなっており、先述したように、ラルフィーは、マティルダの実家を含む農場内の家屋も売り払ってしまった。屋敷の周辺も様変わりし、学校へ続く小道があった牧草地も、「もうそこにはない」(isn't there any more) ため、現在にかかる時制で語ることのできるものは、トレーラーハウスや仮設小屋、そしてそこから聞こえてくる知らない人々の声と、ラジオからきこえてくる音など、昔はそこになかったものばかりだ。過去にあったもの(it was) が何もない(Nothing) いま、マティルダの居場所は「彼女の客間」である。屋敷に暮らしているながら、その屋敷の一部屋すら自分のものではなく、ミセス・アッシュバートンのものだともティルダには感じられる。

ここからわかるのは、「マティルダのイングランド」は、第一部のマティルダの語りに嘘が含まれていたことを、マティルダ本人の語りによって明らかにすることで終わっているということだ。マティルダは第一部において、現在が過去と変わらぬ様相を呈しているという記述に嘘があったことを認め、「過去と同じものなど何もない」と書いて「記録」を終わらせているのだ。

つまり、マティルダの「記録」は、誰の目にも明らかな事実を書き写したのではなく、彼女の主観的な視点が多分に含まれているが、「狂気」にとりつかれた孤独な暮らしにおける苦しみの吐露でもない。そうではなくて、書いているマティルダは、悲しみのあまり「狂気」に陥った自分の過去への執着について、客観的に見つめる視点を獲得しているのだ。ここでマティルダが「記録」する自分について書いている部分をもう一度引用してみたい。

I am writing this in the drawing-room, in fact at Mrs Ashburton's writing-desk. I don't think of it as a story—and certainly not as a letter, for she can never read it—but as a record of what happened in her house after the war. If she hadn't talked to me so much when I was nine there would not be this record to keep, and I would not still feel her presence. I do not understand what has happened, but as I slowly move towards the age she was when she talked to me I slowly understand a little more. What she said has haunted me for thirty-nine years. It has made me old before my time, and for this I am glad. I feel like a woman of sixty; I'm only forty-eight. (ME 89)

マティルダが書いているのは、まったくの作り話ではないという意味において「物語」ではないが、ミセス・アッシュバートンへの「手紙」を書いているわけでもない。マティルダはまだ「彼女の存在を感じて」いるというが、ミセス・アッシュバートンもう居ないし、マティルダの書いたものを読むこともできないのだということは理解している。

だが、ミセス・アッシュバートンが語り聞かせたことは、マティルダの心から消えてなくなることはなく、ミセス・アッシュバートンの記憶は、マティルダに「とりついて」離れない。だが、39年間も「とりつかれて」いたせいでマティルダは「歳よりはやく老けてしまったけれど、それが嬉しい」のであるという。1939年の夏を一緒に過ごしたミセス・アッシュバートンの歳に近づいていくたび、マティルダには自分の身の上へ起きたことへの理解が少しずつ深まるのを感じる。上の引用では60歳になったような気がする書いていたマティルダは、作品の末尾では「彼女と同じくらい老いてしまったのかも」(may perhaps become as old as she was) とすら考えており、そのときはじめて過去と関わりのない現在について書き、「記録」することができるようになった。

他者が生きた過去を自分の内に刻み込んでしまったマティルダは、自分が生きた時間よりも長い過去を知る者となり、そのことは彼女に老いを感じさせている。だが、年齢を重ねるごとに「狂気」から遠ざかり、客観的な視点をもって「記録」を眺めることができる時間の経過をマティルダは嬉しく感じている。戻ってくることはないであろう夫のことを思い出しながら一人で暮らすマティルダが寂しさを感じていないとは言い難いが、マティルダが過ごした時間、そして、書くことによってもたらされた老いの感覚はいま、マティルダの「狂気」を癒す可能性を秘めたものになったのである。

おわりに

老いることとは、記憶のなかの歳月が長くなることでもある。第一部において、ミセス・アッシュバートンを「かわいそうなおばあさん」だと思っていたマティルダには想像もつかなかったような経験と、記憶の蓄積が、書き手となった語りの現在のマティルダにはある。マティルダは、自

分にはしか見えていなかった過去を、違う角度から見直すことのできる視点を持ち、記憶を記録する人となった。ミセス・アッシュバートの過去をも生きようとしたマティルダが記録すべき歳月は、彼女がこの世に生まれ、生きた48年間という時間よりも長い。マティルダの老いの意識は、他者の生きた時間を自分の人生の記憶の一部としたこと、そしてそれを記録することによって起きたものであるといえるだろう。

本論考では、「マティルダのイングランド」において、ミセス・アッシュバートの記憶を共有することによって芽生えたマティルダの「狂気」と、その後の人生における「老い」の意識の関連について読み解いた。書き手になったマティルダが感じている「老い」の意識は、記憶する時間の長さによって生じたものであることを示したが、通常は精神的にも衰弱をとまなうはずの「老い」の意識がマティルダにとってはむしろ「狂気」からの回復を示している可能性について明らかにするためには、より詳細な語りの分析や文学作品における記憶の概念についての議論を欠くことができない。また、今回は「マティルダのイングランド」のみを扱ったが、老いをテーマとして読み解くことのできるトレヴァーの他作品との関係において考えることも含め、それらの点については今後、別稿をしたためたい。

※本研究はJSPS科研費 18K12320の助成を受けたものです。

註

- (1) 啓蒙主義時代の知識人たちの長寿への関心および、18世紀の科学信仰に懐疑的であったジョナサン・スウィフトが『ガリヴァー旅行記』で描いた老いについては別稿「『新しい時代』の老齢? : 18世紀イギリスにおける老齢についての一考察」(『山梨国際研究』第14号、pp.75-84)に示した。
- (2) Trevor, William. 'Matilda's England' in *Lovers of Their Time and Other Stories*. New York: Penguin. 1992. pp.39-125. 以降、同著から引用する場合は、MEと略記し、本文での引用箇所のあとに (ME ○○) とかっこ内で示す。なお日本語訳は拙訳によるが、短編選集『聖母の贈り物』における榎木伸明訳(国書刊行会、2007年)を参考にさせていただいた。
- (3) Trevor, William. 'The Tennis Court' in *Angels at the Ritz and Other Stories*. Middlesex: Penguin. 1979. pp.80-98.

引用参考文献一覧：

- 大石和欣『家のイングランド：変貌する社会と建築物の詩学』名古屋大学出版会、2019年。
- 合田典世「A "Light" of Passage——ウィリアム・トレヴァー『アトラクタ』を読む」『横浜国立大学教育人間科学部紀要 Ⅱ 人文科学』第19巻、横浜国立大学教育人間科学部、2017年。1-9頁。
- 中野恵津子「訳者あとがき」ウィリアム・トレヴァー『密会』中野恵津子訳。新潮社、2008年。
- ポーヴォワール、シモーヌ・ド『老い』下巻、朝吹三吉訳。人文書院、1990年。
- 若島正『乱視読者の英米短篇講義』研究社、2003年。
- Cannadine, David. *The Decline and Fall of the British Aristocracy*. New York: Vintage, 1999.
- Hartung, Heike. *Aging, Gender and Illness in Anglophone Literature: Narrating Age in the Bildungsroman*.

New York and London: Routledge, 2016.

Schirmer, Gregory A. *William Trevor: A study of His Fiction*. London and New York: Routledge, 1990.

Trevor, William. *Angels at the Ritz and Other Stories*. Middlesex: Penguin, 1979. Trevor, William. *Lovers of Their Time and Other Stories*. New York: Penguin, 1992.